

北 一輝と二・二六事件（承前）

——その周辺者の思想的対比——

木 村 時 夫

一 緒 言

筆者は先に「北 一輝と二・二六事件——その切点の解釈をめぐって——」と題する小論⁽¹⁾において、北が二・二六事件そのものの謀議に参画したことがなく、事件勃発後、一、二参加将校との接触や、電話による示唆があったが、それは事件と本質的にかかわりのないものであることを、事件後における参加将校や北自身の証言によって明らかにした。また同事件を審理した一、二の法務官の証言を通じ、北を事件の首魁として極刑に処したことが、陸軍上層部による特殊の政治的判断および圧力によるものであったことも示唆しておいた。そうしてその小論において、少なくとも北が二・二六事件に直接関係のなかったことを明かにしたと思うが、その中で取扱ったことは、時期的には事件勃発の直前からに限られ、しかも事件関係者の証言のみを通じ、いわば外面的に事件と北との関係を明かにしたにすぎないものであった。

この小稿においては、事件に参加したいわゆる青年将校の国家改造思想と、北のそれとを対比しつつ、必ずしも

北の思想が全面的に受容されていなかったこと、および青年将校運動といっても、北の思想に対する批判から、北を離れた一派のあったことを明かにしたい。さらに北自身についても種々な思想上の変化のあったことを辿り、北が現実につづった二・二六事件のような形で、国家の改造を考えていたかどうかを検討してみたいと思う。

先の小論に続いて、本稿においても、北と二・二六事件との関係の有無の検討が一貫した主題であるが、出来れば北一輝そのものの人間像により迫り、昭和初頭以来の我が国におけるナショナリズムの運動の特質を、いくらかでも明らかにすることが出来ればとも思うのである。

二 北一輝と事件関係者との思想的対比

1 事件首謀者の思想

最初に二・二六事件首謀者とされる磯部浅一、村中孝次、西田税の思想について見てみたい。この三人はいずれも軍籍を去って民間人として活動していたもので、中でも西田は事件直前に計画を知らされ、北と同じく直接事件の謀議に参画したとは思われないが、北の代弁者として青年将校の中で重きをなしていた。そうしてこの三者がい

ろいろな点で思想的色合いを異にし、北に対する評価においても微妙な点で食い違うことも明らかにするであろう。磯部はその手記の中で「青年将校は改造^{イカ}方案を実現する為めに蹶起^{ゴウキ}したのでもなく」「二月蹶起にあたって青年

将校は、北、西田両氏から指令指揮など絶対に受けておりません。」と記し、事件と北との関係を否定しているが、彼自身の北の思想に対する共感ほとんど絶対的であったように、彼の「獄中日記」(昭和十一年七月三十一日から同八月三十一日までを記したもの)や獄中の手記類によって、その信念を記そう。

八月一日

——余の所信とは日本改造^{イタ}方案大綱を一点一角^{イタ}も修正する事なく完全に之を實現することだ／方案は絶対の真理だ、余は何人と雖も之を評し、之を毀却することを許さぬ／方案の真理は大乗仏教に真徹するものにあらざれば信ずる事は出来ぬ／……

日本の道は日本改造方案以外にはない、絶対にない、日本が若しこれ以外の道を進むときには、それこそ日本の没落の時だ／明かに云っておく、改造方案以外の道は日本を没落せしむるものだ、……

余は多弁を避けて結論だけを云っておく、日本改造方案は一点一画一句悉く真理だ、歴史哲学の真理だ、日本国体の真表現だ、大乗仏教の政治的展開だ、余は方案の爲めには天子呼び来れども舟より下らずだ⁽⁴⁾。

北の著作中に現われた天皇觀や国體觀は偽装された尊王主義であり、實際には社会民主主義の偽装であるとされ、反北の陣営や事件審理の過程でしばしば問題になるのであるが、磯部にはこれに対する疑念は一切ない。ことに最後の、「余は方案の爲めには天子呼び来れども舟より下らずだ。」の一節は、北が『改造法案』の中で、「コレ国民が本隊ニシテ天皇が号令者ナル所以」と言つて、常に国家（国民）を主体として、天皇をその下位に位置づけた北の重要な思想体系をそのまま踏襲したものである。

八月十一日の項に

陛下 日本は天皇の独裁国であつてはなりません、重臣元老貴族の独裁国であるも断じて許せません、明治以後の日本は、天皇を政治的中心とした一君と万民との一体的立憲国であります、もっとワカリ易く申上げると、天皇を政治的中心とせる近代的主権国であります、左様であらねばならない国體でありますから、何人の独裁をも

許しません(傍点筆者)⁽⁵⁾

と記している、その国体観は、北が『日本改造法案大綱』(以下『改造法案』と略称)中の「国民ノ天皇」に対する註の中で、「此時(維新革命をさす―筆者注)ヨリノ天皇ハ純然タル政治的中心ノ意義ヲ有シ、此ノ国民運動ノ指揮者タリシ以來現代民主国ノ総代表トシテ国家ヲ代表スル者ナリ。即チ維新革命以來ノ日本ハ天皇ヲ政治的中心トシタル近代的民主国ナリ」と言っているのと全く同一であると言ってもよい。

磯部は北の『改造法案』の一字一句を暗誦していたようで、その「獄中手記」の中で、

北氏が改造方案の結論に於て、……神の如き權威を以て「日本民族は主権の原始的意義統治権の上の最高の統治権が國際的に復活して、各国家を統治する最高国家の出現を覺悟すべし」と云って居る所は、正に我建國の理想たる八紘一字の大精神を、現日本に実現せんとする高い愛國心のあらわれであるのです。⁽⁶⁾

と記している中のカギカッコの部分は、北の原文そのままである。そうしてそれは又、北が國家改造の目的とするところに対し、磯部が絶對的に共感していたことを示す証左でもあろう。

したがって北一輝ならびにその『改造法案』を絶對的に信奉し、

北一輝氏、先生は近代日本の生める唯一最大の偉人だ、……

唯だ余が日本歴史中の人物で最も尊敬するは楠公だ、而して明治以來の人物に於ては北先生だ(「獄中日記」八月四日の項)

と記し、

革命家を量る尺度は日本改造方案で、方案を不可なりとする輩に対して断じて油断するな、(同右)⁽⁷⁾

と記したのである。そうしてそれは蹶起した同志に対する批判となり、後に残った同志に対する警告ともなり、次のように記す。

八月廿一日

日本改造方案大綱は絶対の真理だ、一点一画の毀却を許さぬ／今回死したる同志中でも、改造方案に対する理解の不徹底なる者が多かった、又残っている多数同志も、殆どすべてがアヤフヤであり、天狗である、だから余は、革命日本の為に同志は方案の真理を唱へることに終始せなければならぬと云ふことを云ひ残しておくのだ、……方案は大体いいが字句がわるいと云ふことなかれ、民主主義と云ふは然らずと遁辞を設くるなかれ、堂々と方案の一字一句を主張せよ、一点一画の譲歩もするな、而して、特に日本が明治以後近代的民主国なることを主張して、一切の敵類を滅亡させよ。⁽⁸⁾

磯部が獄中であって、初期の樂觀論から、北が極刑に処されるのではないかという不安に駆られるにいたる段階で、北だけは無事に出所させ、新しい革命の指導者とすべく、北が事件と無関係であることを縷々陳述し、その減刑をかちとるために腐心したことは、すでに前稿においてふれたところである。

同じ主謀者でも村中孝次になると、北の『日本改造法案大綱』に対する見解は少しく異なる。彼はそれが成立した歴史事情や、それを現実に応用する場合の諸矛盾を指摘し得る冷静な眼をもっていたといえよう。すなわち、彼の獄中における手記「続丹心録」の中で、

抑々「日本改造法案大綱」はデモクラシー及社会主義の高潮期に、此兩者を否認折伏することを主眼として、諷諭的文調を以て叙述したるものにして、簡明確切を旨とする為、日本国家の現段階に於て採り得べき一つの構図

を示して、其注解に於て著者の思想を断片的に批擡せるものなり。而して排日侮日の真只中にある上海に於て執筆せるものなるが故に、著者の愛国的情熱と国家主義的徹見とが、躍々として紙面に躍るを認め得べし、吾人が同書を愛読し、且之れによりて啓発せらるる所以は一に著者の愛国心と、特に国体に対する徹見とによるものなり。⁽⁹⁾

と記している。彼が最後に北の「国体に対する徹見」によつて啓発されたとしているのは、果して彼が北の国体觀の根底にある真意を、磯部ほどにも理解していたかどうか、疑問の存するところであるが、それはともかくとして、『改造法案』に対する、彼の右のような把握と認識とは公判廷における、次のような陳述となつて現われている。

日本改造法案は私の私心的理想であります、之が実行には自から順序方法があります。又、憲法の停止、戒嚴令の実施等は大権に属するもので、此等の点に反対するものではありません。……

改造法案は十余年前に書いたもので、其以後の社会情勢の変遷其他で時局的に現在不穩当な点がありますが、私は其精神を認めると云ふ意であります。⁽¹⁰⁾

しかし、村中が『改造法案』中の憲法の停止や戒嚴の布告に反対しながら、軍隊使用による、結果的には叛乱と目せられる事件の謀議に参画したのは何故か、疑問なしとしない。この点に関し、彼は同じ手記の中で、

吾人は三月事件、十月事件等の如き「クーデター」は国体破壊なることを強調し、諤々として今日迄諫論し来れり。苟も兵力を用ひて大権の發動を強要し奉るが如き結果を招来せば、至尊の尊嚴、国体の權威を奈何せん、故に吾人の行動は飽く迄も一死挺身の犠牲を覚悟せる同志の集団ならざるべからず。⁽¹¹⁾

と記している。

実際には指揮命令による軍隊使用であった、二・二六事件の結果からみて、「一死挺身の犠牲を覚悟せる同志の集団」による決行ということは出来ないが、村中があくまでも、いわゆる維新のさきがけ、ないし捨て石となる覚悟であったこと、したがって『改造法案』による、クーデターによる軍政府の樹立が目的でなかったことは理解できる。

村中はいわば陸軍内部の派閥抗争の結果、軍籍を逐われた者であるから、当然のことながら軍部というものを信賴していなかった。したがって軍政府の樹立が事件の目的であったとする見解には、絶対に承服出来なかったらしく、

……軍政府樹立、而して戒嚴宣布、是れ正に武家政治への逆進なり、国体觀念上吾人の到底同意し能わざる所なりとす。又今日果して政治的経綸を有する軍人存するや否や、軍政府なる武人政府が国政を變理して過誤なきを得るや否や。国民は軍部の傀儡となり其願使を甘受するものに非ず、軍權と戒嚴令とが万事を決定すべしとは、中世封建時代の思想なり、今の国民は往時の町人のみに非ず、一路平等に大政を翼賛せんとする自負と欲求とを有す。劍を以て満州を解決せしが如く、国内改造を断行し得べしとする思想の愚劣にして危険なることを痛感しあり、従つて吾人は軍政權に反対し、国民の一大覚醒運動による国家の飛躍を期待し、これを維新の根本基調と考ふるものなり。吾人は国民運動の前衛戦を敢行したるに留る、……

国民のこの覚醒運動なくしては、区々たる軍政府とか、或は真崎内閣、柳川内閣といふが如き出現によって、現在(12)の国難を打開し得べけんやと記している。

この手記で注意すべきことは、村中の軍部に対する不信、ひいては軍政府なるものに対する強い不信感であるが、さらに、不信を抱く軍部に代るものとして、彼が国民運動に期待し、二・二六事件をもって「国民運動の前衛戦」としている点である。

彼は別の箇所で

不肖等は軍事費の為に剣を執りしにあらず、陸軍の立場をよくせんが為に戦ひしにあらず、農民の爲なり、庶民の爲めなり、救世護国の為に戦ひしなり、而して其根本問題たる国体の大義を明かにし、稜威を下万民に遍照せらるる体制を仰ぎ見んと欲して特権階級の中樞を討ちしなり。⁽¹³⁾
とも記している。

また彼は残った同志に対し、

青年将校ノ運動ニテハ維新ハ来ラズ

不肖等今回ノ挙ハ青年将校運動ヨリ全国民運動ヘノ転機ヲ成シ得タルヲ信ジアリ⁽¹⁴⁾
と遺言し、取調べの憲兵の「皇室の敬蔑上に及ぼしたる影響如何。」の問いに対しても、

一時宸襟を悩まし奉り恐懼に堪へませんが、この結果皇室に対する国民的敬蔑が必ずや向上し、国体精神に徹した自覚、国民の奮起に依って昭和維新が逐次に完成されて行くものと信じます。⁽¹⁵⁾
と答えている。

その後の歴史の示す所は彼の期待に反し、国民の間に軍部批判の声が上りながら、結局はその権力に盲従して戦争に突入するわけであるが、彼が軍に対する不信に発して、国民運動による現状打破の構想は、北が決して持つこ

とのなかった視点である。北が靈告によるとは言え、叛乱軍をもって正義軍とし、その真意はともあれ、真崎内閣の成立を希望したのとは著しく異なる点である。事件只中における軍人内閣説に対しては

真崎内閣説の如きは吾人の拳を予知せる山口大尉、亀川氏等の自発的奔走にして、吾人と何等の關係なく行われたるもの⁽¹⁶⁾

と言っている。

村中が軍籍を逐われ、長く民間人として改造運動に従事していたことが、国民運動という視点をもつにいたつたとすれば、同じく民間人として改造運動の指導的役割を演じた、西田税にも同様の視点がある。それについては後に触れることにする。

村中が公判廷において

公訴事実依りますと北一輝の日本改造法案を實行せんが為め蹶起したる如くなつて居りますが、蹶起の趣旨は天皇の大権を干犯せんとしたる奸賊に対し不義^{ヤミ}の天誅を加へんが為でありまして、此点を明瞭にさること無くば私達が此度蹶起した精神は全く死んでしまします。⁽¹⁷⁾

と陳述したのは、所信に照しての彼の最後の抗議であつたであろう。

二・二六事件の「蹶起趣意書」は村中の起案になるといわれるが、その中には右の彼の陳述が主旨となつていて、事件後の方針や計画については全くふれるところがない。参加した将校の中には、この「蹶起趣意書」の内容によつて参加を決意した者も多かったという。

刑死の直前、村中が妻にあてた遺書の中で、『改造法案』と關係なしと断言したことは、前稿においてすでにふ

れたところである。

西田税が終始青年将校の暴走を制止し、五・一五事件の際は、そのために裏切者と目され、拳銃で狙撃されて重傷を負ったこと、および二・二六事件に際しては、決行計画およびその時期を打明けられた時、非常な苦悩の後にようやく決意したという経緯についても、前稿においてふれておいた。

西田が時期尚早ということで、絶えず青年将校を抑止していた事情について、最近、松本清張氏は次のような推測をしている。すなわち

反対派に拳銃で撃たれるような危ない行動の連続よりも、やはり安穩な生活に入ることを望む年齢であつた。西田は政治浪人北の代理人となるか、あるいは彼の応援で代議士にでもなることを志望していたのではあるまいか。西田が相沢事件の公判闘争に没頭し、磯部浅一や栗原安秀らの急進派青年将校の暴発を極力押えていたのは、他にいろいろな理由があるにしても、その主な動機の一つはこうした彼の心境を推定できそうである。⁽¹⁸⁾

たしかに松本氏の推定は、彼の年齢を考え、さらに彼が大正十五年の宮内省怪文書事件（北海道御料林の払下げに不正があるとして、宮内大臣牧野伸顯らの辞職を勧告した事件）の中心人物として、北一輝の介入もあって脅迫事件にまで進展し、結局金銭的解決を狙ったような経歴からみて、北をも含めて、従来の国家改造運動を放棄したかに見える。しかしたとえそれが単なる彼の夢想であり、未然に終ったとはいえ、西田は昭和二年には天劍党の結成を構想し、

天劍党は軍人を根基として普く全国の戦闘的同志を連絡する国家改造の秘密結社にして、日本改造法案大綱を経典とする実行の剣なりとす。⁽¹⁹⁾

の檄文を同志に配布しているのである。

さらに生前の北一輝の許に頻繁に出入りしていたという、原田政治氏の談話によれば、昭和十年の春頃、西田の仲介で、中野の北邸において秩父宮殿下を北に会見せしめたという。⁽²⁰⁾ 原田氏は紺の背広姿の殿下と、洋服姿の西田および軍服姿の安藤輝三大尉を実見したというから誤まりではなからう。西田と秩父宮とが士官学校の同期生であり、その卒業間際に、西田の手から『日本改造法案大綱』を殿下に手渡したということは、今日では事実としてみてよからうし、従って原田氏の語る事実もあり得なくてはなからう。勿論、その会見の場で何が語られたか知る由はないが、西田が革新の意志を放棄していなかったと見てよいのではないか。

松本氏は相沢公判に賭けた西田の努力に対しても疑いをいれているが、むしろ法廷闘争という合法的手段による、少なくとも軍部内部の革新を目指していたと見るべきではないか。

憲兵の取調べに対する、

単に軍人のみが蹴起すると云ふ事は、犠牲が多いただけ効果がないと思ひました。私も最初の場合は、直接行動に依る革新は否認しませんが、威力の乱発はいけないと思つて居りました。⁽²²⁾

という、彼の陳述の中に過激派の暴走を抑止してきた理由を見るべきではなからうか。

さらに西田は

最近、私は軍人よりは民間の方へ同志を獲得したいと考へて着々進めて居りました。

民間への働きかけは、特に労働団体へ注目いたしました。

就中、市電従業員や海員組合の方へ手を付けて居りました。

私の国家改造への理想論としては、現在の人は明治時代と違ひ発達して居りますから、改造も困難だと思ひました。従つて官吏は官吏、財閥政界^テは政界は政界と云ふ風に、各方面の革新的思想を有する者を漸次啓蒙して拡大したいと思つて居ります。

此革新的意識の普遍化したものが、即ち維新^{イナ}でてあります。

即ち現社会の各層に、夫々有して居る革新的思想を、各社会層毎に拡げるのが御維新⁽²³⁾だと思ひます。とも述べている。

右の、国家改造運動を限られた軍人層から一般国民層へ拡大しようという視点は、前にも記したように村中と同一のものである。これを代議士への布石運動と見るのはどうか。さらに西田は『改造法案』の信奉者である。『改造法案』によれば少なくとも現議会は解消されるべきものである。

西田は北の『改造法案』に対しては、

私達の理想社会即御維新として出来た社会状況は、明日の日本を建設するのでありまして、其の大綱は日本改造法案に示して居る建設内容で大体良い様に思ひますが、其実現の方法に就て、私は理想としては、天皇の御力に依つて実現したいと思つて居りました。

要するに、日本改造法案に示した内容が現在出来れば理想社会だと考へて居りましたので、日本改造法案を指導原理とし、現社会を啓蒙⁽²⁴⁾すべく努めて居るのであります。

と述べている。

西田は軍籍を去つて、革新運動に従事しながら、大川周明の許を去つて北にはしり、その北から『改造法案』の

版權を譲られるほどその信頼を受け、五・一五事件以後はその生活費すら北から与えられるほどの関係であったが、同時に北が、

（青年将校と）会談した話の内容は私の性質として理論めいた事や議論を上下すると云ふ様な事は非常に嫌ひなので愉快に多く漫談して別れる程度で若し改造案に対して質問などが出る場合にはそんな面倒な話は西田君と諸君で研究して呉れと云う位にして多く話題を他に転じたのであります。⁽²⁵⁾

と云うように、西田は常に北の代弁者であり、また『改造法案』の解説者でもあった。（北のこのような態度が、一部青年将校の不信を買い、また松本氏が、この時期の北が全く改造運動を放棄したとする論拠の一つをなすのであるが、それについては後にふれる。）

しかし、西田の『改造法案』に対する態度は、磯部のそれとはちがう。先の陳述でも示したように、その実現の方法においては「天皇の御力に依って実現したいと思つて居りました。」と言つてゐるからである。

これは北が国家の改造を「天皇大権ノ発動ニヨリテ」と言つてゐるが、その注で、「日本ノ改造ニ於テハ必ズ国民団集ト元首トノ合体ニヨル権力発動タラサルヘカラス」と言い、具体的にはクーデター方式をとり、「クーデターハ国家権力則チ社会意志ノ直接的発動ト見ルヘシ」としているのは、西田が、少なくとも天皇と国家との関係についての考え方を異にしていたことを示すものである。北が欠いていた、一般的な国民運動による改造という視点も、具体的な実現の手段として西田によつてはじめて採用されたもののなのである。

2 参加現役将校の思想

以上、事件の首謀者であつた、磯部と村中および謀議には参加しなかつたが、理論的指導者の立場にあつた西田

の抱懐する思想を、とくに北の『改造法案』との関連においてみてきたわけであるが、磯部の絶対的信奉を除けば、後二者は『改造法案』を指導原理としながらも、その実現の手段、順序においては、北とその見解を異にしていたことが分る。なおこの三者を一括して取扱ったのは、彼等がいずれも軍籍を離れ民間人として行動していたからである。

次には当時現役将校として事件に参加し、首謀者もしくは有力な指導者とされる者について、事件参加の目的を、『改造法案』との関係において明らかにしてみたい。

北が事件前において、交友関係があつたと称している直接参加の将校は、栗原安秀中尉、安藤輝三大尉、香田清貞大尉の三人だけである。（後に事件関係者として連坐した者には、山口一太郎大尉、大蔵栄一大尉、末松太平大尉らがいる。）

しかし同じ首謀者もしくは指導者といひながら、ここに一括する将校の、北の『改造法案』に対する理解は、磯部のいうようにきわめて浅く、蹶起の理由についても、『蹶起趣意書』の範囲を出ず、『改造法案』との関係を極力否定していることが共通している。

○栗原安秀

彼は「叛乱被告事件を敢行したる其目的如何。」の憲兵の質問に対し本件を契機として昭和維新を断行し様としたことが目的であります。

私の解する昭和維新とは、現在の矛盾せる国家機構を改善せんがために、財閥、軍閥、官僚特に其の中樞をなす元老重臣ブロックを紛碎^{ぶんさい}して、一君万民の境地を現出せんとするのであります。⁽²⁶⁾

とのみ述べている。そうして検察官の論告求刑に対しては

- 1 検察官は蹶起の趣旨を歪曲し、故意に叛徒の賊名を以て葬り、全く精神をも葬れば、断じて承服する能はず。
 - 2 社会民主革命を実行云々は香田清貞の陳述に略同じなるも、日本改造法案大綱に付、北、西田等の思想は決して社会民主主義の思想にあらずと反駁す。(以下略)⁽²⁷⁾
- とある。

○香田清貞

彼は憲兵の、「今度の事件の目的は何であるか。」の質問に対し、

其蹶起趣意書の通りであります。⁽²⁸⁾

のみ答えている。

ただ公判廷において国家革新思想を抱くにいたった経過の陳述の中で、

神宮アバートに菅波大尉を訪れ其の話を聴きたるが、(昭和七年の十月事件直後―筆者注) 此の時疑問を感じたのは該計画には決行後の建設計画とも称すべきものあることなり。之に関し考へたる結果、建設計画を有することは我が国体と相容れずとの結論に到達せり。……

今回の事件に於て憲兵隊の方より取調を受けたる際、これ丈けの大事件に建設計画を有せざる筈なしと言われたるも、自分は斯の如き確信を有することを以て弁明したる次第なるが、此の結論を得て菅波大尉に意見を述べたる処、同感なりとのことなりき。⁽²⁹⁾

という趣旨の陳述をしていることが注意される。菅波は早くから北の影響を受け、その理論性は北から第一の後継

者を以て目せられていたが、後、『改造法案』の内容に疑問を感じ、同じ経過を辿った大岸頼好大尉の意見に同調するようになった人物である。

香田は事件後の建設計画を持っていなかったが、陸軍大臣や軍事参議官を通じて、上部工作のごとき行動のあったことに対して

我々の今回の挙が天聴に達したる場合、御下問に對し我々の氣持を正しく奉答し得る人に御願して我々の精神を真直に聖斷に懇へて頂くことが一番大切なりと考へ、陸軍大臣閣下、各軍事参議官閣下等にお願したる次第にて、国家枢要の地位に在る方々を利用して我々の私慾、私見を遂げんと考は毛頭有せず。上部工作と云へば兎角誤解を招く虞あるを以て、此点特に御諒察を切望す。⁽³⁰⁾

と弁明している。

事件後における具体的建設案なし、とする彼は檢察官の公訴事實に對して、村中、磯部の述べたる公訴事實に對する異見は自分も全然同意見なり。

尚ほ、用語の点に於て「昭和維新を斷行し」、「維新斷行の企圖を以て」等の語を使用しあるは、恰も我々が乗り出して国家社会の制度を變革し又は變改せんとする企圖を有したるが如く誤解せらるる虞あるを以て、承服し難し、我々は決して左様な目的企圖を有したるにあらず、唯だ我々は今上陛下朝見式に於て賜はりたる勅語の聖旨を実現せんとしたるに過ぎず⁽³¹⁾……。

と抗議し、論告求刑に對しても、

論告中に於ける、北、西田等の信奉せる日本改造法案により社会民主主義革命を実行せんとクーデターを斷行せ

んとしてたりとあるは承服出来ざる所なり、何となれば今回の蹶起は蹶起の趣意書に明示せる如く国体の真姿顕現により一路御維新に入らんとしたるものなり、⁽³²⁾……

と最後の陳述を行い、北、西田らの信奉する『改造法案』と無関係なことを、重ねて強調している。

○安藤輝三

安藤は現役将校中、事件への参加を最も躊躇したが、参加の決意後は積極的に行動し、また最後までその決意を変えなかった人物として知られているが、参加の理由については、「趣意書の通りであります」と答えるだけで多くを語っていない。公判廷においても蹶起の理由についてのべていないが、論告求刑に対しては「日本改造法案を信奉し、社会民主革命を実行云々は、香田清貞と同様の陳述をなす」⁽³³⁾とあるから、北の思想との無関係を強調したと思われる。彼には処刑を前にして遺書があり、その中で、

……判決ノ理由ニ於テ全ク吾人ヲ民主革命者トシテ葬リ去レリ、又コトサラニ北一輝、西田ト関係アル如クシ、又改造法案ノ実現云々トシタリ／万斛ノ恨ヲ吞ム……／嗚呼我々ハ共産党ト同ジニ取扱ハレテキルノテアル、軍当局ハ北、西田ヲ罪ニ陥レンガタメニ無理ニ今回ノ行動ニ密接ナ関係ヲツケ、兩人ヲ民主革命者トナシ極刑ニセント策動シアリ……吾人ヲ犠牲トナシ、吾人ヲ虐殺シテ而モ吾人ノ行ヘル結果ヲ利用シテ軍部独裁フアツシヨク改革ヲ試ミントシアリ、一石二鳥ノ名案ナリ……⁽³⁴⁾

と記している。

○其の他の将校

中橋基明は北との接触は無かったが、『改造法案』には眼を通したことがあるらしく、獄中の手記で、

吾人は決して社会民主革命を行ひしに非ず。国体叛逆を行ひしにも非ず。国の御稜威を犯せし者を払ひしのみ。

……吾人が成仏せんが為には昭和維新あるのみ。「日本国家改造法案」は共產革命ならず。真意を読取るを要す。吾人は北、西田に引きづられしに非ず、現在の弊風を目視し之を改革せんとするには、軍人の外非ざるを以て行ひしなり。

と記している⁽³⁵⁾。

その他の将校が蹶起の理由について、『改造法案』もしくは北、西田の名にふれているところは全くない。

竹島継夫はその遺書の中で、

あてにもならぬ人の口を信じ、どうにもならぬ世の中で飛び出して見たのは愚かであった。身を保ち、家を斉へ、父母に孝に兄弟に友に、是れまことの忠の道であつた。⁽³⁶⁾

と記しているが、彼のいう「あてにもならぬ人」が、北や西田を指すものでないことはいうまでもない。憲兵調書によつてみる限りでは、西園寺襲撃への参加を説得した、対馬勝雄中尉あたりをさすのではなからうか。

清原康平は憲兵の質問に対し、

今度の事件に関しては全く他人より動かされ、自分の信念と相当の距離を見出した事を深く遺憾に思つて居ります。⁽³⁷⁾

と答え、公判廷においても、

自分は十分なる信念はなかったが、安藤大尉に対する信頼と、命令に依て動かすから心配するなどの安藤大尉の言に依り参加を決意するに至つた……⁽³⁸⁾

と陳述している。

これを要するに首謀者以外の将校は、北、西田との面接の有無、あるいは『改造法案』に対する関心の有無にかかわらず、少なくともその蜂起が『改造法案』の実現を目指したものでなく、極力北、西田との関係を否定しているのである。それは各自独自の時勢観と、それを打破しようとした情熱の結果であったともいえよう。そうして中には、自主的な判断をもたずに、他からの勧誘によって参加した者のあったことは、一、二の例の示すところである。

三 北 一輝に対する批判的思想

1 革新運動内部の確執

北が自己の著作について青年将校から、その真意を追求されると、その答弁を一切西田に委していたということも前にも記した。それに類することとして、福永憲（西田と幼年学校同期で陸軍中尉、最初西田に共鳴して国家改造運動に従事していたが、後、見解を異にして袂を分った）は、北が宮内省怪文書事件から保釈出所した直後の昭和二年二月、西田に同伴して北を訪ねた時の模様を次のように述べている。

北は法華経の一節を唱えながら、「革命は五年後か、あるいは十年後か」とどぼける。まるで嘘のように平凡な人物に変わったように思えた。⁽³⁹⁾

このようなかつての理論的指導者であった、北の変貌に対する青年将校の失望もさることながら、青年将校の関心は北の著作に現われている、機関説的な天皇観や、『改造法案』に示された改造断行の手段についての、北の真

意で、その点はしばしば北を追求し、その真意を質そうとしたようである。

大蔵栄一（革新派将校の中心的人物で陸軍大尉、二・二六事件には直接参加しなかったが、叛乱者を利すの罪で禁錮五年となった。）はその回顧録の中で、

「あのころは若くて、すべてがげんか腰だったからなア」

この言葉は（『国体論及び純正社会主義』の中の——筆者注）、皇室に対する不敬の言辭と思われる点をあげて、私がつめよった時の北の返事であつた。⁽⁴⁰⁾

と記している。

菅波三郎は大正十四年七月、同志とともに北を訪ね、

「日本改造法案の精神及び改造の原理は解することができるが、クーデターの一語がわからない。この場合、日本の軍隊は如何なる形で参加するのか、具体的な説明を知りたい」⁽⁴¹⁾

と北に迫ったが、北はついに答えなかったという。

渋川善助（陸士退学後、国家改造運動に従事。二・二六事件の謀議には参画しなかったが、事件勃発後その渦中に投じ、謀議参与の罪で死刑に処された。）は昭和十年、『私の昭和史』の著者、末松太平氏に対し、

「実は北さんの『国体論及び純正社会主義』が天皇機関説なんだ。それでおれは北さんにただしてみた。が北さんは、あれは書生つぼのとき書いたものだから、というだけでんでとりあわないんだ。」

と言って困った顔をしていたといふ。⁽⁴²⁾

日時は明らかでないが、北の実弟聆吉が、第三者の立場から次のように記している。

青年将校の多くは兄を尊敬し、「日本改造法案大綱」の著書などを通じて共鳴していたが、然し兄の「一挙に宮中に侵入して、天皇をもり立てよう」という革命方式に対して、青年将校は「日本は南米諸国とは違う。軍人は天皇を絶対視しており、そういうことは許されません」といって反対していた。ここに兄と将校達とは天皇観が違っていた。兄は天皇機関説論者であったのだ。

ある時、兄の議論が怪しからぬというので若い将校達が後から来て「もう一度、先生の天皇に関する御説を拝聴したい」と申込んで来たことがある。兄は平然とこれら血氣ざかりの将校を前にして、「天皇は世襲の大統領のようなものである」と説明していた。⁽⁴³⁾

このような一部青年将校の北に対する不信と、『改造法案』に対する疑問とは、かつて北の最も信頼をかり得ていた菅波三郎や、青年将校中の理論的指導者をもって目されていた、大岸頼好のような人物を次第に北から離れさせ、大岸の影響が強かった末松太平も、北の貧農や小作問題に対する考えの甘さや、その在郷軍人中心主義に批判を抱いて北の許を去っていった。⁽⁴⁴⁾

そうして青年将校の革新運動は西田や磯部らを中心とするいわば北信奉派と、大岸、菅波に民間人中村義明らを加えた北批判派——国体派に分裂し、前者は雑誌「核心」に拠り、後者は同じく「皇魂」に拠ってそれぞれの主張をゆずらなかつたようで、それは満州事変の勃発以後次第に激化していった。

事変のために満州に出征した末松（敬称略）は、現地で菅波に会い、この問題について話し合ったようで、私は菅波中尉に、『日本改造法案大綱』は金科玉条なのか、それとも単なる参考文献なのか、単なる参考文献であるとするれば、別に好案があるのか——といった点をただした。

これに対して菅波中尉は「実はそのことで自分も考えているところだが、『日本改造法案大綱』を金科玉条とみるわけにはいくまい」といった意味のことをいった。

そのとき「これなどはその意味において、一応いい案だと思っているがね」といつて出したのが「皇国維新法案大綱」というのだった。これは私も前に見ていた。青森の連隊時代の大岸中尉の作品で、十月事件の前に私案として同志に印刷配布したものだ⁽⁴⁵⁾った。

と記している。引用文中の「皇国維新法案大綱」は、高橋正衛氏によると「昭和皇政維新国家総動員大綱」が正しいという。

末松は内地帰還後、昭和九年春、西田を訪れ、たまたま同席していた青年将校の前に、北の『日本改造法案大綱』に対するわれわれの態度はどうあるべきかを質したが、西田をはじめ誰も口を閉して答えなかったが、ひとり磯部が「金科玉条」であると答えたという。末松がそれに対し「過渡的文獻にすぎないというものもある」と言ったが、それに対しては誰も何ともいわなかった⁽⁴⁶⁾という。

末松は、西田一派と、当時和歌山の連隊に在勤していた大岸との間に確執のあることを知り、自から大岸を訪ね、確執の争点ともいふべきものを質したようである。その模様を

では一体、『改造法案』のどういった点が意見の衝突となっているのだろうか。これに就いて大岸大尉はあまり語ることを好まぬふうだった。ただこの点は骨が粉になってもゆずれないといって、二三点それをあげるにはあげた。がそれがどういふことであつたかは、いま記憶にない。私はしかし『改造法案』批判よりも、それに代わる案があればそれを知りたかつた。それで「では『改造法案』に代わるものがありますか」ときいた。

大岸大尉は「あるにはあるがね」といったきりで口をつぐんだ。……

「これはまだ検討を要するもので、人には見せられないものだが……」

といって私の前に置いた。私はひらいてみた。冒頭に『皇国維新法案』と銘打ってあって、革新案が筆で書きつらねてあった。これが『改造法案』に代わる大岸大尉の革新案の草稿だった。がそれはまだ前篇だけで、完結していなかった。

私がそれを読み進んでいるとき大岸大尉は「將軍たちがえらく『改造法案』をきらうんでね」とつぶやきもした⁽⁴⁷⁾と記している。

末松は別に、二・二六事件勃発直後の回想の中で、

北、西田に対しては、『日本改造法案大綱』とともに、先入観的に、青年將校を支持する軍首腦のなかにさえ、反撥があるときいている。……大岸大尉が別に『皇国維新法案』を起案し印刷した苦心は、この辺の消息を知っておればこそだった。大岸大尉がこれの原稿を、はじめて私に提示したとき、それを手中にもてあそびながら、將軍連は『改造法案』がきらいだからなア……とつぶやいていた⁽⁴⁸⁾。

とも記している。(右の引用中の『皇国維新法案』は、末松の『私の昭和史』の初版では『皇政維新法案』となっているが、今日残っている文献からみて、『皇政維新法案大綱』が正しいと思われる。また私は末松が満州において、菅波から見せられたものとは別なもので、大岸が昭和六年の、末松のいう「皇国維新法案大綱」——正しくは「昭和皇政維新國家總動員大綱」に加筆訂正したものであったことは、末松のこの回顧録によっても分る。)

末松はその日、大岸からその原稿の出版を依頼され、その後、渋川善助の手によってそれは出版された。その時

期は昭和九年の初夏の頃であつたと推測される。

それに関連して、末松のつぎの記述は両派の確執の深さを思わせるものである。

その時期を渋川が十月ごろといったか、この年末年始のころといったか、記憶はいまいだが、ともかくそのいずれかのころ、（前後の記述から、それは昭和十年の年末年始のころ、すなわち、事件勃発の数カ月前であつたと推定される。——筆者注）西田税がどこで手にいれたか。『皇国（政か？）維新法案』を一冊渋川の前につきつけ、これは一体誰が印刷したんだといつて、えらい剣幕で詰めよつたという。……

私が満州から帰つてはじめて知つた『日本改造法案大綱』をめぐるの、東京の西田税と和歌山の大岸大尉との間の確執は、このときになつても、まだちつともやわらいでいないわけだ⁽⁴⁹⁾つた。

2 『皇政維新法案大綱』について

北の『日本改造法案』に対して、その内容は定かではないが、大岸頼好が絶対に容認できぬとした、二、三の点、および、軍主脳の北批判を背景とした、その『皇政維新法案大綱』の内容は、ほぼその輪廓が推測できないわけではないが、中村義明の次の証言の内容は、その基本的な理論、すなわち北の主張と明らかに対立する諸点を明らかにするであろう。

中村義明は昭和二年の中頃、共産党に入党して活躍したが、同六年八月にいたつて転向し、国家主義者遠藤友四郎の影響をうけ、同九年皇魂社を創立し、雑誌「皇魂」を発行し、西田一派の「核心」に対抗していた人物である。彼も二・二六事件に際し、叛乱幫助の容疑で憲兵の訊問を受けたものである。（昭和十一年七月一日不起訴処分）

彼が、「和歌山の大岸大尉と語り合ひたる維新運動の動向は如何。」の憲兵の質問に対し、

維新運動は神祖の降し給へる「修理固成」の御神勅を承認必謹、之を日本民族の歴史的使命として万民の一魂一体なる天業の翼賛を其の本義と致します。

従って維新運動の原理は、産靈の生命哲理の上に立つ「朕と一心になって」の大詔を承認必謹、上御一人へのまつろひ皈（帰）一する一体主義にあります。かくて維新を為すの力は御稜威にあり、維新運動は上御一人の御事の意識的な翼賛そのものであるといふ本質が規定されます故に、維新運動の実践は国体本義の顕現、臣道の宣明の上に立つ万民個々の行蔵の反省を第一義と致します（以下略⁽⁵⁰⁾）。

と答えている。

これによればその天皇観は神道的であり、北のいう復古的革命主義ともいえよう。それが北の機関説的天皇観と相容れぬことはいうまでもない。彼に思想的影響を与へ「皇魂」にも寄与した、遠藤友四郎は、北の『改造法案』をしばしば「赤化大憲章」といって、非難したという。⁽⁵¹⁾

さらに中村の証言によれば、菅波らの斡旋によって、「核心」と「皇魂」との合併が協議されたが（昭和十年八月末）、

核心社同人の方々から皇魂の八月号附録として、発表しました皇政原理の一考察について、そう勝手にこんな重大な意見を発表されては困ると云ふ話が出ました……⁽⁵²⁾

ばかりでなく、其後も

十一月号に発表致しました維新運動要綱の一考察が、又核心社方面でどうも皇魂社が出すぎて困ると云ふ噂を聞いたり、各種事情がありましたので、皇民新聞の十一月二十五日号を一人で編輯し、之を最後に廃刊し、前述の

協力依頼關係を解消致しました。⁽⁵³⁾

と証言しているところからみて、両者の確執の深かったことが分る。

さて、大岸の手になる『皇政維新大綱』は、その参考文献として、北の『日本改造法案大綱』を挙げており、(他に権藤成卿の『皇民自治本義』『自治民範』や、遠藤友四郎の『天皇信仰』および『日本思想』等をかかげている。)その用語の中には、『改造法案』からとったと思われるもののがかなりある。

顧問院、国家改造内閣、在郷軍人団会議、銀行省、航海省、鉱業省、農業省、工業省、商業省、労働省、等々の名称および機関がそれである。

しかし名称が同一であっても、大岸の抱懐する思想は北のそれと著しく異なる。すなわち北が緒言の中で、「挙国一人ノ非議ナキ国論ヲ定メ、全日本国民ノ大同団結ヲ以テ終ニ天皇大権ノ発動ヲ奏請シ、天皇ヲ奉ジテ速カニ国家改造ノ根基ヲ完ウセザルベカラズ。」とあるのに対し、大岸は

——此ノ崇高ナル使命ノ遂行途上ニ横ハル障碍ヲ断除シテ其ノ目的達成ニ欠クベカラザルモノハ実ニ絶大ノ威力ヲ有スル軍隊ナルコトヲ認識セザルベカラズ。是皇国ノ徹底維新ト共ニ徹底セル国家総動員ノ必須不可欠ナル所以ナリ。然リ而シテ皇国自ラノ指導原理ニ拠ル徹底維新及之ト兼該実施セラルベキ国家総動員トハ実ニ尊皇愛国ノ情理ニ徹底セル所謂地涌菩薩的日本人ノ上御一人ニノミ連結セラレタル鉄魂ニ依リ遂行セラルベシ。約シテ曰ク。

一切ヲ挙ゲテ上御一人へ 一切ヲ挙ゲテ国家総動員へ

と記している。(橋本徹馬『天皇と叛乱将校』所収のものによる。)

北が「天皇ヲ奉ジテ」とは言っているが、それは国民を本隊とする天皇機関説的色彩を留めているのに対し、大岸のそれは「一切ヲ挙ゲテ上御一人へ」と唱え、天皇中心主義を表明している。さらに注目すべきは、彼にあっては国家の改造、即国家総動員体制の確立であったことである。国家総動員体制は、すでに一部陸軍将校の間で研究されており、未発に終った、三月事件ならびに十月事件の後に企図されていたものであるといわれ、二・二六事件首謀者によって、ファッショ的改造案として非難されたものである。磯部が獄中において、「陸軍省アタリのインチキ改造思想⁽⁵⁴⁾」といい、「陸軍中央部アタリの云ふ改造思想⁽⁵⁵⁾」と称したものがそれである。そうしてそれはまた統制派といわれた、大岸のいう、北をさらった將軍連によって推進されたものである。大岸がいち早く『改造法案』に対する反感を察知して取入れたものであらう。

さらに大岸は軍隊の使用を暗示しているが、北がクーデター方式を明示しているのに対し、その具体的な使用法は示さず、クーデターの文字もこれを見ることが出来ず、単に「不当存在ノ中枢ヲ処分ス」とのみ記している。

第五章の「維新ノ発程」の中では、政党の禁止、既成言論機関の閉止、戒嚴令の宣布、憲法の停止、両院の解散の上に、すべて「天皇大権ノ発動ニ依リ」の字句を冠している。北が、二十五歳以上の男子による普通選挙を明示し、文官任用令、治安警察法、新聞紙条令、出版法等の法律の廃止による、「国民自由ノ恢復」を明示しているのに対し、そのような民主化ともいふべき規定は全くない。

労働省についても、大岸案は「一切ノ労働者ノ権利ヲ保護ス」という抽象的な一行だけで、北が「労働者ノ権利」(巻五)の一章を設けて具体的且つ詳細にその保護規定を設けているのは雲泥の差である。

また、北が「私有財産限度」および「土地処分三則」の章で、財産については具体的金額、土地についても具体

的地価を掲げて、その私有限度を示しているのに対し、大岸案は、財産および土地について、それぞれ「私的所有ノ限度ヲ定メ限度以内ノ所有ヲ時宜的ニ認許ス」としているのは、或いは現実的規定ともいえよう。しかし北が徴集地を年賦金をもって農民に下附し、自作農の創設を企図しているのに対し、大岸案は「天皇ハ農耕地ノ大部分ヲ農村民ニ対シ村落自治体單位ニ交付シ各村落自治体ヲシテ國家ノ管理下ニ努メテ協力耕作セシム」と規定し、一種の共同耕作を暗示している。

内鮮共各戸ノ次、参男、次、参女等及商業国营ヲ原則トシテ実施スル結果生ズベキ商業従事者等ハ之ヲ集團シテ滿蒙ニ移住セシム。

の一項や、北の案の中にはなかった、國家總動員省を設置し、「生産的各省ハ固ヨリ消費的各省」と密接に連繫せしむるとした項などは、それが國家總動員の最終形態なのであろうか。北が常に國家權力の強化を標榜しながらも、常に北なりの國民の安寧と幸福とを目的としたのに対し、大岸案のそれには民意尊重の意図はこれを見出すことができない。

さらに大岸案に「天皇ハ公賦公課ヲ通シ三公七民乃至四公六民、定率ヲ以テ税制ノ標準トナス」と規定し、それに注して「税制ノ詳細ニ関シテハ我旧制（大化以後）ト現時ノ情勢トヲ較量検討スルヲ要ス」としたあたり、或いは農村自治に関し、「其村内各戸ノ代表者ヲ以テスル平等普通ノ互選ニ依リ、才幹徳操アル自治体代表者若干名ヲ推挙シ之ヲ以テ自治会ヲ構成シ云々」とあるのは、いずれも権藤成卿の所説によるものであろうが、全体との調和を欠いた規定ないし制度というべきであらう。

より仔細に両者を比較検討するならば、大岸案の意図するところ、ないしは北の『改造法案』に対する批判の内

容がより浮び出るのであるが、右の簡単な比較によっても、大岸がかつて末松に対し、「骨が粉になっても」と言った、北に対する批判の内容が明らかになるのではなからうか。

すなわち第一には北の天皇機関説に基づく構想に対して、天皇大権主義を以てしたこと、第二には北の民主主義的企図に対して、極端な国家統制主義を以てしたこと、第三には、北が労働者や婦人に対してその権利を保障し、社会保障や教育制度についても、具体的規定を示した自由主義的な態度に対し、一切それらを否定した態度等である。

大岸は軍部、とくにその上層部が北に示した批判や反感を巧みに回避し、一部軍部の趨勢となっていた国家総動員体制の確立を、いろいろな所説を参考にして構想したものであろうが、北ほどには体系化されず、具体化もされていない。

なお大岸頼好は、戦後東久邇宮内閣の成立に際し、かつての上官であった、国务大臣小畑敏四郎中将を通じ、その施策に参画したが、彼が当時常に手許に置いたのは、『皇政維新法案大綱』ならぬ、北の『日本改造法案大綱』であったとい⁽⁵⁶⁾う。

所詮大岸は機を見るに敏なる人であったのであろうか。末松が回顧録の最後で語る、大岸頼好の死は、かつて北に対抗した、革新派の指導者としては、奇怪にして悲惨なそれと言う以外にない。⁽⁵⁷⁾

四 結 語

北一輝と二・二六事件の関係を明らかにしようとした、本稿は先の小論に続いて、まず事件参加者の思想、特に

北との関係を見てみた。

最初に事件主謀者と見られる磯部、村中、西田を取上げ、ついで参加現役将校中の主要人物、栗原、香田等に及んだわけであるが、前者においては三者それぞれに北の『改造法案』を、多少のニュアンスを異にしながらも信奉していたこと、しかし、その実現のために蜂起したものでないことを明らかにした。

後者については、すべてかつて北と面識があり、『改造法案』に眼を通してはいたが、それに対する信仰はもとより深い理解はなく、従って、その内容の実現を最初から企図したものでなかったことを明らかにした。

さらに、陸軍青年将校の革新運動といっても、すべてが北の『改造法案』を經典としていたのではなく、中にはかつて北の指導を受けた者でも、その後、『改造法案』の内容に対する疑念から、その許を離れ、別の思想体系や行動方針をもつにいたった一派について、大岸頼好や、その手に成る『皇政維新法案大綱』の内容を、北の案と對比しつつ検討し、両者の間に根本的相違のあることを明らかにした。

これを要するに、軍法会議が北一輝を首魁として断罪した、北と二・二六事件との関係は、参加将校の大半が、北の思想の影響をうけ、その『改造法案』の実現を企図した、ということにあったのであるが、本稿においては、必ずしもそうとは断定し得ないもののあることを明らかにしたわけである。

先の小論もそうであったが、本稿もまた、結局は北を取巻く関係者の思想の考察に止まり、ついに北自身の思想およびその変遷に及ぶことができなかった。

つぎの稿においてはこのことを明らかにし、北自身二・二六事件のような事件の勃発を期待していなかったことを明らかにし、それにも拘わらず彼が首魁として断罪された理由が、どのようなものであったかを明らかにして三

部から成る小論の末尾としたい。

注(1) 「早稲田人文自然科学研究」第十三号(昭和五十一年二月)を参照。

(2) 磯部浅一「獄中手記」(河野司編『二・二六事件』所収。三二九―三〇頁)

(3) 同右三〇―一頁

(4) 磯部浅一「獄中日記」(同右二八〇頁)

(5) 同右二八七頁

(6) 同右三二〇頁

(7) 同右二八三頁

(8) 同右二九七頁

(9) 村中孝次「続丹心録」(河野前掲書所収)二〇七頁

(10) 村中孝次の第二回公判(昭和十一年五月二日)における陳述(『二・二六事件秘録』Ⅱ以下『秘録』と略称Ⅱ第三卷の八七―八頁)

(11) 河野前掲書一八五頁

(12) 同右一八六頁

(13) 同右一九〇頁

(14) 村中孝次「同志に告ぐ」(河野前掲書二二頁)

(15) 村中孝次憲兵調書(『秘録』一ノ二〇九頁)

(16) 「続丹心録」(河野前掲書一九二頁)

(17) 注の(10)参照

(18) 松本清張『北一輝論』二三三頁

(19) 『現代史資料』巻四の三六頁

(20) 原田政治「素顔の北一輝と二・二六」(『歴史と人物』第五十二号)

(21) 芦田紀之「秩父宮と二・二六事件」参照

(22) 西田税第二回聴取書(『秘録』一ノ三五四頁)

- (23) 同右
- (24) 同右
- (25) 北一輝第四回聴取書（北一輝著作集、二ノ四六七頁）
- (26) 栗原安秀第一回訊問調書（『秘録』、一ノ一二九頁）
- (27) 東京陸軍軍法会議公判状況（『秘録』、三ノ一二八頁）
- (28) 香田清貞訊問調書（『秘録』、一ノ二九頁）
- (29) 東京陸軍軍法会議公判状況（『秘録』、三ノ九八頁）
- (30) 同右（『秘録』、三ノ九九頁）
- (31) 同右九六頁
- (32) 同右一一七頁
- (33) 同右一一八頁
- (34) 河野前掲書四二二三頁
- (35) 同右八九頁
- (36) 同右六三頁
- (37) 清原康平訊問調書（『秘録』、一ノ二五二頁）
- (38) 前出公判状況（『秘録』、三ノ一〇六頁）
- (39) 芦田紀之『曉の戒嚴令』四三頁
- (40) 大藤栄一『二・二六事件の挽歌』六三、四頁
- (41) 芦沢紀之『秩父宮と二・二六事件』七二頁
- (42) 末松太平『私の昭和史』二四二頁
- (43) 北吟吉『謀られた北一輝』（『経済往来』昭和三十年十二月号）
- (44) 芦沢前掲書二〇六頁
- (45) 末松前掲書九一頁
- (16) 同右九九、一〇〇頁

- (47) 同右一〇四頁
- (48) 同右二七〇頁
- (49) 同右二四二頁
- (50) 中村義明第一回聴取書『秘録』二ノ三三頁
- (51) 末松前掲書二四二頁
- (52)(53) 注(50)の二九、三〇頁
- (54)(55) 河野前掲書三一八、九頁
- (56) 末松前掲書二四三頁
- (57) 同右三一七頁以降参照